

V ネットワーク構築の実際

本報告では、第Ⅳ章で挙げられているような先行事例及び高専と特別支援学校の連携について、「福島県立郡山養護学校と仙台高等専門学校の事例」、「Web コミュニティサイトの構築」、「研究協議会」を行った報告である。

1. 福島県立郡山養護学校と仙台高等専門学校の事例

国立特別支援教育総合研究所 新谷洋介

金森克浩

福島県立郡山養護学校 渡邊弘規

(1) ニーズ事例フォーマットの検討

ニーズ事例フォーマットの項目は、研究分担者である、研究員、高等専門学校教員、特別支援学校教員と検討し作成した。

項目を検討する上で参考にしたのは、研究シーズ&ニーズ集（全国 KOSEN 福祉情報教育ネットワーク、2013）のニーズ事例項目（支援が必要とされる環境、必要とする支援）及び掲載された内容であり、この項目をもとに、シーズ側で得たい情報を加えながら検討を行い、表 5-1-1 の項目立てとした。シーズ側では、開発する支援機器等教材を持ち運びたいのか、設置して使用したいのかを含めた大きさや重さの情報や、ソフトウェア、ハードウェアのどちらで実現したいかなどの情報が必要とされた。また、子どもがどのような動きができるのかについての情報も必要とされた。

表 5-1-1 ニーズ事例フォーマット

課題	
障害種	
授業単元・必要な場面	
対象の子どもの実態	身体的機能面
	認知面
	使用できる支援機器（スイッチなどの支援機器を、どの部位で、どのように使用しているか）
授業で達成したいねらい（子どもの活動の視点で）	
支援機器・教材について考えられること、希望等がありましたら、例示してください。 （大きさ、重さ、ソフトウェアによる支援・ハードによる支援などや、図など）	
その他	

(2) ニーズをもとに教材開発した事例

1) 教員からのニーズの収集

作成した「ニーズ事例フォーマット」を福島県立郡山養護学校（以下、郡山養護学校と記す）

の教員 135 名に、回答を求めた。回収した結果、22 件の回答があった。ニーズの傾向を分類すると、ハードウェアベースで対応可能なものが 14 件、ソフトウェアベースで対応可能なものが 5 件、両方で対応可能なものが 3 件であった。

2) 担当者による検討と仕分け

郡山養護学校の支援機器に専門性のある自立活動担当教員と、国立特別支援教育総合研究所教育情報部研究員の 2 名で、回答を得られた「ニーズ事例フォーマット」を仕分けした。なお、仕訳時点で回答のあった 15 件のニーズを対象とした。

選定から除外したものは、教材製作レベルでできるもの（5 件）、市販されている製品があるもの（2 件）であった。

候補に挙がったものは、安全上専門的な知識を必要とするもの（1 件）、専門的な知識を必要とするソフトウェア（3 件）、専門的な知識を必要とする機器（4 件）となった。

候補に挙がった 8 件の中で、すぐに活用したいものを、教員と相談した結果、朝の会の「おはようのうた」の伴奏をするために利用する、「特定の和音を出力できるソフトウェア」、ゆっくり動くものを見たい活動をするための、「絵が動き追視できる絵本」の 2 件を依頼することとした。

仙台高等専門学校（以下「仙台高専」とする。）に相談した結果、学生が取り組んでいる内容と一致した、「絵が動き追視できる絵本」を連携開発することとなった。なお、このニーズが記載された「ニーズ事例フォーマット」は表 5-1-2 の通りである。

表 5-1-2 「絵が動き追視できる絵本」を希望したニーズ事例フォーマット

課題	ゆっくり動くものを見たい
障害種	肢体不自由・視覚障害（弱視）
授業単元・必要な場面	お話を見よう・聞こう
身体的機能面	目の前 50cm ぐらいのところに提示すると、色に気付き注視、追視する。
認知面	iPad で提示した絵や写真に気付いて注視、追視する。
授業で達成したいねらい	・生徒の追視の動きを広げたい ・ページがかわるタイミングはこちらで操作できるとよい
支援機器・教材について考えられること	レオ・レオニ「あおくんときいろちゃん」という絵本の絵が動くと良いかなと思います。

(3) デジタル絵本の開発

1) 特別支援学校と高等専門学校とのやりとり

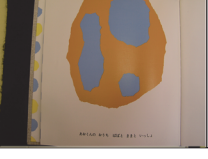
依頼した内容は、絵本の内容を、動きや変化のあるもので表現させることである。単純な動きのみであれば、PowerPoint のアニメーション機能を使用し製作できるが、この絵本の特徴である、色が混ざる様子を表現することができず、専門的な知識がある仙台高専へ依頼することとした。

主な情報交換の様子を表 5-1-3 に示す。郡山養護学校担当教員（依頼）、対象児童担任、仙台高専担当教員（学生指導）、仙台高専学生（開発）の 4 名である。

表 5-1-3 開発までの流れ

発信者	受信者	内容
郡山養護学校担当教員、対象児童担任	→ 仙台高専担当教員	製作の依頼と、依頼内容（表 5-1-4）の送付
仙台高専担当教員	→ 仙台高専学生	依頼内容を元に学生に開発をするよう指導
仙台高専学生	→ 仙台高専担当教員	開発した教材のイメージの確認
仙台高専担当教員	→ 郡山養護学校担当教員、対象児童担任	
郡山養護学校対象児童担任	→ 仙台高専担当教員	教材の確認と続きの依頼内容の送付
仙台高専担当教員	→ 仙台高専学生	完成版の送付
仙台高専学生	→ 郡山養護学校担当教員、対象児童担任	

表 5-1-4 郡山養護学校担当教員からの依頼内容（3 / 40 ページ）

番号	挿絵	文	動きなど、できればおねがいしたいこと
1			原画に近く、青と黄色の混ざっている静止画。原画は切り絵なので自然なギザギザがあります。難しい場合には○で結構です。表紙の写真をそのまま貼っていただいても良いぐらいかな、と思います。
2		あおくんです	バックが黒の静止画。
3		あおくんの おうち ぱぱと ままと いっしょ	バックが黒の静止画。

2) 開発した教材

①開発環境

Windows7、Microsoft PowerPoint2010

②特徴

PowerPoint の基本機能のみで開発され、色や動きの速さなどを、教員が変更することが可能である。図 5-1-1 のように、アニメーション機能を用いて動きを表現している。

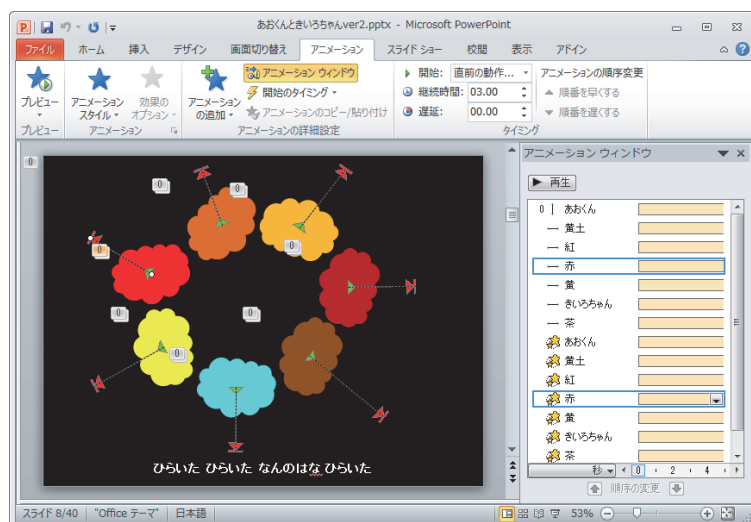


図 5-1-1 アニメーション機能を使用した動きの表現

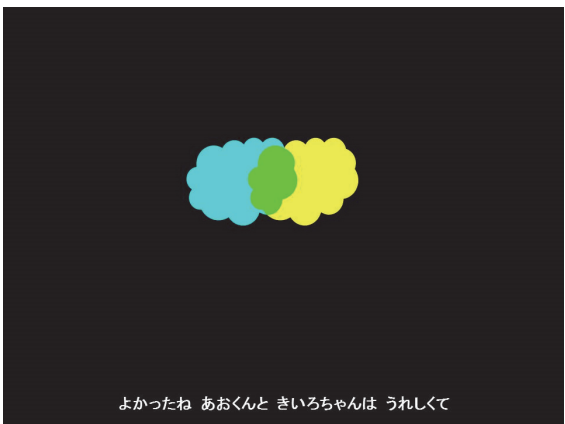
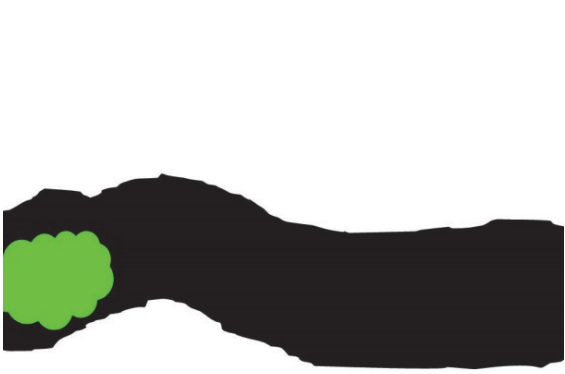
③内容

仙台高専学生が開発した「絵が動き追視できる絵本」は、「あおくんときいろちゃん」（作・絵：レオ・レオニ、訳：藤田圭雄、出版社：至光社）の絵本 40 ページを元に、PowerPoint 上で再現した教材である（図 5-1-2）。

スライド数は、絵本と同様に 40 スライドであり、担当教員は、子どもの追視状態を観察しながら、スライドを操作しながら読み聞かせを行うことができるものである。読み聞かせ時間は、約 15 分程である。

なお、本教材を作成するにあたっては、郡山養護学校担当教員より出版社への利用許諾を得た上で絵本を利用している。

ページ・特徴	スクリーンショット	説明
P 8 ダンスの動きを表現		輪になってダンスを踊る場面である。 アニメーション「直線」と「拡大/収縮」を利用し、動きを表現している。また、「繰り返し」や「継続時間」を設定することで、ゆっくりと 2 回繰り返し動くようにしている。

P13 ストーリー上の動きを表現		あおくんが、きいろちゃんの家に移動する場面である。 家に行く様子を、アニメーション「直線」と「スピン」を利用し表現している。「スピン」を利用することで、歩いているような揺れる動きを追加している。
P18 色が混ざる様子を表現		あおくんときいろちゃんが、左右から中央へ移動し重なった部分が緑色になる場面である。 重なった際に、アニメーションの「フェード」を利用し緑色を表示させることで表現している。
P22 曲線の移動を表現		トンネルに沿って、移動する場面である。 アニメーション「アーチ」などを利用し、トンネルに沿って移動する様子を表現している。

④教材の変更

開発した教材は、注視・追視の動きを広げたいことをねらいとしているものである。ゆっくり動くものを見たいことが課題にもなっており、絵本の動きの速さについて変更が可能になっている。

図 5-1-3 のように、PowerPoint 編集画面のアニメーションのセッティング項目にある「タイミング」の「継続時間」を変更することで、動きの速さを変更することができる。

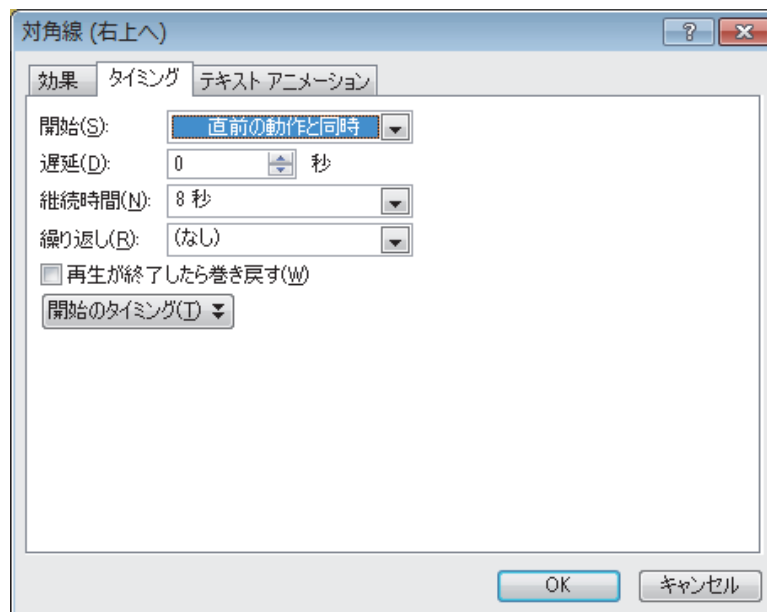


図 5-1-3 タイミング設定画面

(4) 授業実践について

1) 児童の実態

- ・ 小学部2学年、知的代替教科（音楽・体育）・日生・生単・自立の類型。
- ・ 過去に紙媒体の絵本を用いて授業を行っていた。
- ・ 目から30cmの距離で5cm角の大きさの物やカードを捉えることができる。あまり大きな物であると捉えることが難しい。iPad miniの大きさだと捉えやすい。

2) 授業内容

①ねらい

- ・ 色や形の名前を覚え、マッチングすることができる。
- ・ 頭部を動かしながら、追視をすることができる。

②教科名等

自立活動

③授業の流れ

0～15分 トイレでの排泄指導

15～30分 色や形の弁別

30～45分 iPadでの読み聞かせ

3) 授業の様子

- ・ 「あおくとときいろちゃん」については、本教材の前から絵本で読み聞かせをして馴染んでいる絵本だった。
- ・ 絵本の時に比べてよく見るようになった。iPad上でのキャラクターの動きに合わせて頭を動かしながら、自分で見える位置を調整して見ることができた。
- ・ 青と黄色が混じって緑になる部分や、キャラクターが動いている部分で自らの発見があり、

それを言葉に出すことができた。

(5) 郡山養護学校教員が考えるシーズの必要性

1) シーズの必要性

「福祉情報教育研究シーズ&ニーズ集 Vol.2」に記載されているシーズ 19 件を対象に、開発につなげるために、特別支援教育において必要な機器か、郡山養護学校にとって必要性があるかを調査した。調査に当たっては高専の教員から、シーズの解説を受けた上で、「特別支援教育においてその機器は必要ですか」、「あなたにとってその機器は必要ですか」の質問を、「4：絶対に必要である」、「3：必要である」、「2：必要でない」、「1：まったく必要でない」の 4 件法で必要度を回答してもらった。回答者は、本研究の主旨に賛同した、郡山養護学校教員 18 名である。

必要度の平均値を表 5-1-5 にまとめた。結果は、「特別支援教育においてその機器は必要ですか」の設問に対しては、「3：必要である」以上の必要度のシーズが 13 件あった。必要度が高いものの上位 3 件は、No.1「ユニバーサルマップの開発」、No.10「視線によるパソコン上の文字・数字入力ができるソフトウェア」、No.11「簡易型お酌ロボット」であった。また、「あなたにとってその機器は必要ですか」では、「3：必要である」以上の必要度のシーズが 2 件あった。必要度が高いものの上位 3 件は、No.1「ユニバーサルマップの開発」、No.11「簡易型お酌ロボット」、No.17「マッチング学習支援教材」であった。

「あなたにとってその機器は必要ですか」が、「特別支援教育においてその機器は必要ですか」に比べ、必要度が低いシーズが多かった理由としては、現在担当している子どもによって必要かどうか左右されることが予想されたが、そのような結果となった。

表 5-1-5 各シーズの郡山養護学校教員が考える必要度

No.	タイトル	特別支援教育においてその機器は必要ですか	あなたにとってその機器は必要ですか
1	ユニバーサルマップの開発	3.72	3.28
2	アタッチメント式移動補助具	3.39	2.33
3	車いすの移動支援機器に利用するセンサアプリケーション	3.11	2.28
4	3次元 CG 技術を利用した車いす通行シミュレーションシステム	2.94	2.33
5	箱車の電動化	2.83	2.56
6	遠隔支援可能なタイピングソフトウェア	3.28	2.22
7	ウェアブル色識装置	3.35	2.61
8	視覚障害者向け簡易手書きメモ入力システム	3.35	2.59
9	教材作成・プレゼン補助・意思表示ツール作成	3.33	2.83
10	視線によるパソコン上の文字・数字入力ができるソフトウェア	3.56	2.61

11	簡易型お酌ロボット	3.50	3.17
12	肢体不自由者用文字入力アンドロイドアプリ	3.33	2.39
13	介護動作の解析	2.83	2.44
14	洗濯ものの自動たたみシステム	2.56	2.28
15	健康づくり学習支援システム	2.78	2.39
16	圧電素子を利用したスイッチ	3.33	2.83
17	マッチング学習支援教材	3.50	2.94
18	視覚サーボ型レーザーレスポインティングデバイス	2.71	2.33
19	楽しく学べる点字学習支援機器	3.17	2.39

2) シーズ&ニーズ集の必要性

同じく、「福祉情報教育研究シーズ&ニーズ集 Vol.2」の必要性について、「4：絶対に必要である」、「3：必要である」、「2：必要ない」、「1：まったく必要ない」の4件法で回答してもらった。

結果は、平均値 3.75 であり、郡山養護学校教員にとって、シーズ&ニーズ集の必要性の高さが伺われた。

3) 開発

本調査を元に郡山養護学校と連携して、次の機器の開発について検討をしている。具体的には、上記の必要度が高いと判断したものの中から実現性や市販されていないものなどについて検討を行っている。本研究期間では完成には至っていないが、No.10「視線によるパソコン上の文字・数字入力ができるソフトウェア」を応用した視線での学習ソフトについて協議している。

(6) まとめ

研究員、高専教員、特別支援学校教員でニーズ事例フォーマットを検討したことにより、高等専門学校等に教材の開発を依頼する際に必要な情報として、操作の観点や教材の大きさ、重さなどの観点を伝えることで、より教材のイメージを伝えることができた。

特別支援学校のニーズは、安全上専門的な知識を必要とするもの、専門的な知識を必要とするソフトウェア、専門的な知識を必要とする機器が出され、市販されていない、特別支援学校で必要な支援機器等教材があることがわかった。反面、教材製作レベルでできるものや、市販されている製品があるものも出され、授業の中で活用してみたいアイデアはあるが、教材の製作方法や、支援機器等教材の情報が不足していることが考えられた。

本事例においては、高専が開発を行っているが、高専の学生指導の一環として実施している。特別支援学校教員とのやりとりを通して、高専学生は、特別支援学校の現場を知ることや、教員からのニーズを得る機会となることが考えられる。

高専と特別支援学校のお互いのシーズ&ニーズを知る機会がなければ、連携することが難しい。高専側のシーズや、特別支援学校のニーズの情報について、必要性の高さが伺われたことから、

「福祉情報教育研究シーズ&ニーズ集」などの共有できる情報元の必要性を感じた。また、各シーズの郡山養護学校教員が考える必要度についての資料が得られ、この資料は、高専側において参考となる資料となるのではないかと考える。

文献

全国 KOSEN 福祉情報教育ネットワーク（2013）.「福祉情報教育研究シーズ&ニーズ集」.
VOL.1.

全国 KOSEN 福祉情報教育ネットワーク（2015）.「福祉情報教育研究シーズ&ニーズ集」.
VOL.2.

2. 支援機器や教材作成にかかる情報交換のための Web 上のコミュニティサイトの作成

国立特別支援教育総合研究所 金森 克浩

本研究を推進するに当たってネットワークの構築を図るため、高専と情報交換を円滑にするための連携するシステムとして、Web 上のコミュニティサイトを作成した。以下にその機能と活用経過を記す。

(1) Web サイト名

「特別支援教育における支援機器活用ネットワーク構築に関する研究
～高等専門学校との連携による支援ネットワークの構築～」(以下、「コミュニティサイト」と呼ぶ。)(図 4-2-1)

国立特別支援教育総合研究所
共同研究

特別支援教育における支援機器活用ネットワーク構築に関する研究
～高等専門学校との連携による支援ネットワークの構築～

お知らせ

この部屋は高等専門学校と特別支援教育関係者の情報交換のための部屋です。

支援機器開発等、皆さんと活発な情報交換を行えればと思っています。

メニュー

- ・トップページ
- ・シーズ&ニーズ調査(第2回)
- ・参考情報
- ・第1回研究協議会
- ・第2回研究協議会
- ▼グループスペース
 - ▶【参加者限定】研究協力者の部屋
 - ▶交流の広場

カウンタ

COUNTER 00000000

IMAGINE

たとえば、日本語の起源

IMAGINE

掲示板

情報交換のための部屋 >> 記事詳細

皆様よろしくお願ひします kanamori 2015/04/22 16:51:01 (2票)

3月の研究協議会に参加された皆様

先日はたいへんお世話になりました。

ご案内していた、会議室ができましたので、ご連絡申し上げます。

このメッセージは登録されている方々にメールでお送りしています。

ただし、メールに返信しても他のかたにへ反映されません。
メールの最後にあるリンクをクリックして、ログイン掲示板への書き込みが必要となります。

ぜひ、自己紹介等を書き込んでいただければと思います。

また、パスワードについては、初期設定なので、ぜひ変更のほどよろしくお願いいたします。

(図 4-2-1) コミュニティサイト

(2) システム

コミュニティサイトは、NetCommons を利用し作成した。会員登録機能や、掲示板、アンケート、キャビネット等の必要な機能は、NetCommons の標準機能を利用した。

なお、会員登録は、安全上の理由からシステム管理者が行い、自動登録はしないこととした。

(3) 参加者

特総研：4名

高専関係者：5名

特別支援学校関係者：16名

(4) 活用目的

本研究に関わる関係者との情報交換、特別支援学校側のニーズの情報収集、特別支援学校と高専とのシーズとニーズのマッチング。

(5) サイト内容

サイトの内容は、会員登録された会員向け情報と、誰でも閲覧ができる非会員向け情報で構成される。なお、会員は、研究協力者で構成される、「研究協力者会員」と、それ以外の申込者で構成される、「一般会員」の2つの種別がある。

『非会員向け情報』

① トップページ

トップページには、メニューと、研究の概要を提示している。

② シーズ&ニーズ調査（第2回）

本研究における、シーズ&ニーズ調査の依頼文の掲載及び、調査票をダウンロードできるようになっている。

③ 研究協議会

研究協議会の案内文の掲載及び、参加申し込みフォームを設置している。

『会員向け情報（一般会員）』

④ 交流の広場

「掲示板」、「アンケート」で構成され、高専と特別支援教育関係者とで、支援機器開発等の情報交換ができるようになっている。

『会員向け情報（研究協力者会員）』

⑤ 【参加者限定】研究協力者の部屋

「掲示板」、「キャビネット」で構成され、研究協力者同士で情報交換や、資料等を共有できるようになっている。

(6) 活用の課題

NetCommons は CMS (Contents Management System) と LMS (Learning Management System) とグループウェアを統合したコミュニティウェアで本研究においては、関係者との情報交換をするグループの情報共有のための機能と研究協議会などの情報を発信するための外部配信向けのポータルサイトの機能があるため、開発に関わって多様なネットワーク機能を利用することが可能となるために採用した。外部向けの機能としてニーズの集約や研究協議会の案内など

については十分な機能が果たすこととなったが、関係者同士の情報交換利用については 17 件のスレッドと 37 件のメッセージがやりとりされているだけで、具体的な機器開発までには至っていない。

また、本コミュニティサイトは次項の研究協議会参加者の中で参加に同意した教員等を登録し、研究の推進に当たってシーズ&ニーズ集についてのアンケートをとったが十分な回収数がとれず、データとして利用することができなかった。Web フォーラムだけのコミュニケーションに課題があることが明らかになった。

しかし、書き込まれたメッセージの中には「〇〇市には近くに高専がなく、連携の動きはありませんが、今後、他の機関とつながっていくことは、時代の流れとして大切だと感じて、参加させていただくことにしました。」といったことも書かれており、より具体的な提案をしていくことで、連携につながる交流のサイトとして活用できるのではないかと考えている。

3. 支援機器活用のための研究協議会

国立特別支援教育総合研究所 金森 克浩

高専と特別支援学校をつなぐためのコミュニケーションの形として1対1の関係のつながり、コミュニティサイトを利用したネット上での交流と併せて、実際に教材や機器等を見ながら意見交換をすることが有用であると考え、関係者が集まって情報交換する研究協議会を開催した。教材や支援機器の情報を相互に交流させるためには、以下がその概要である。

(1) 特別支援教育における支援機器活用ネットワークに関する研究協議会

日時 平成27年3月21日(土)~22日(日)

場所 国立特別支援教育総合研究所 研修棟 大研修室、第6研修室

主催 国立特別支援教育総合研究所

3月21日(土)

「特別支援教育における支援機器活用ネットワーク構築に関する研究~高等専門学校との連携による支援ネットワークの構築~」

金森総括研究員より、本協議会および共同研究の説明を行った。

「支援機器活用におけるニーズとシーズに関するパネルディスカッション」

司 会：金森克浩（国立特別支援教育総合研究所）

話題提供：渡邊弘規（福島県立郡山養護学校）

竹島久志（仙台高等専門学校）

清田公保（熊本高等専門学校）

指定討論者：田代洋章（e-AT 利用促進協会）

清田氏（熊本高等専門学校）より、「全国 KOSEN 福祉情報教育ネットワークの紹介と『KOSEN 研究シーズ & ニーズ集 Vol.2』発行について」の話題提供がなされた。

竹島氏（仙台高等専門学校）より、シーズ側として「仙台高専の取り組みの場合」について、ニーズをどのようにして集めて、シーズと一致させていくかを中心に話題提供がなされた。

渡邊氏（郡山養護学校）より、ニーズ側として「郡山養護学校でのニーズ調査と特別支援学校での今後の課題」について、ニーズ調査結果と、傾向、どのニーズを高専に依頼していくかの点について話題提供がなされた。

田代氏（e-AT 利用促進協会）より、「ニーズとシーズのマッチングにおける福祉関係者の落とし穴」として、ニーズとシーズのマッチング例を紹介、コスト面の配慮をする、知財への尊重する点について提言された。

それぞれの発表後、指定討論者、話題提供者、参加者間で協議がなされた。

「口頭発表（1セッション 発表20分 質疑10分）」

「ニーズ」谷本式慶（東京都立八王子東特別支援学校）

佐野将大（香川県立高松養護学校）
「シーズ」佐竹卓彦（沖縄工業高等専門学校）

丹下 裕（舞鶴工業高等専門学校）

谷本氏（八王子東特別支援学校）より、「東京高専との連携」について口頭発表がなされた。

佐野氏（高松養護学校）より、「私のニーズと実践」について口頭発表がなされた。

佐竹氏（沖縄工業高等専門学校）より、「シーズ」について、連携の成果物やメリットなどの口頭発表がなされた。

丹下氏〔舞鶴工業高等専門学校）より、「支援機器の製作に関する舞鶴高専の取り組み」について、開発したものの紹介や、支援学校への要望などの口頭発表がなされた。

22日（日）

次のポスターセッションを行い、参加者と協議を深めた。

No.	氏名	校名	タイトル
1	塩本 岳彦	北海道八雲養護学校	病弱特別支援学校高等部における支援機器の活用状況について
2	船木 英岳	舞鶴工業高等専門学校	高専と支援学校の地域連携による技術教育とそれを利用した特別支援教育の質の向上
3	美船 俊介	鳥取県立米子養護学校	支援機器を活用した社会参加の試み
4	縄田登紀子	大阪府立藤井寺支援学校	防災学習！はじめのはじめの第一歩
5	岡本 崇志	大阪府立摂津支援学校	大支援研 ICT 活用プロジェクトの取り組みについて ～大コンとのコラボレーション～
6	内田 考洋 関口あさか	埼玉県立熊谷特別支援学校	創造を『カタチ』に！プロジェクト ～企業とともに肢体不自由のある子どもたちのモノづくりのバリアフリー化を目指した取り組み～
7	藤田美佐緒	香川県立香川丸亀養護学校	ティームティーチングにおけるタブレット端末活用についての研究 ～特別支援教育における音楽科授業に関する一考察～

(2) まとめ

研究協議会参加者からは「入念な打ち合わせと実験とフィードバックを繰り返すことが必要だと感じた。」「まずは関係づくり。特別支援学校と高専が協定を結ぶと特別支援学校の教員が異動になっても連携していけるのではないかと思った。」「定期的に情報交換する場をつくること」「教師自身が目の前の子どもにどうなってほしいかイメージというか夢を持つべき。支援機器を使って生き生きと暮らしておられる人々のことを知り、どんな機器があれば目の前の子どもがそうなれるかを考えて、ニーズを出したほうが使える支援機器の開発につながるのではないかと思う。」「特別支援学校側では、管理職のような立場の方の理解がまず必要。」「学校の立場から言うと、双方が“物”ではなく、児童生徒に目を向けていることが大事だと思う。」「お互いの強みを知り合うことがまず必要かと思うが、両者の子どもが育っていくためのしかけが必要。支援機器を媒介して、交流学习のような、人と人がつながっていけるような取り組みが必要。」といった肯定的な意見を受けている。また、そのほかに、「SNSで情報を共有すると気軽に閲覧できるのではWEB上で過去の開発ライブラリーのアーカイブなどが公開できると良い。」ということで、コミュニティサイトの活用方法についての意見もあった。

出された意見からは、どうやって相互の情報を交換するかが重要であり、「共通の言語」を持つための意見交換の場をいかに作っていくかが重要だと考えられる。

4. まとめ

本章では、ネットワーク構築のためのケーススタディとして仙台大専と郡山養護の連携、高専と特別支援教育側の情報交換を図るためのコミュニティサイトの構築、実際に集まったの研究協議会について報告をした。

高専側でシーズ&ニーズ集を作成したことは、それぞれの立場でそのようなことを考えているのかを知るきっかけとしては重要なものである。しかし、研究協議会の参加者からは「両者が受身な連携とも感じた。両方から提案があっても良いのでは。ニーズ待ちでは成果につながらないと思う。」という意見をいただいた。本研究ではその後にシーズ&ニーズ集についての検討を行い、具体的に特別支援学校、高専、特総研の3者で協議をしながら教材の開発を行ってきた。開発を進めながらわかったことは、特別支援学校からの提案として、教材製作レベルでできるものや、市販されている製品があるものも出され、教材の製作方法や、支援機器等教材の情報が不足していることである。そのためにも、いくつかの情報交換の場が求められるため、コミュニティサイトの活用や特別支援学校の教員や高専の関係者などが交流する場を作ることは重要である。